

うるということを、私もまた見出した。

理想を言えば、われわれは、なんらかの変性状態、ましてや第四レベルの状態を体験する前に、徹底的にこのような仕方準備を整えておくべきである。あいにく、われわれの文化は現在あまりにも精神／＼^{スピリット}靈性が欠けており、その科学的世界観に夢中になっているので、働きかけるに値す何かがあるということ自分を思い出させるため、靈感——より高次のレベルについての閃き——をわれわれはせひとも必要としているのである。たとえより高次のレベルの知識を重めてしまう危険を冒してでも、変性状態についてのなんらかの経験を持つことが、多くの人にとってきわめて重要であると私は信ずる。

【原注】

(1) Tart, *Transpersonal Psychologies* 参照。C. Tart, *Hidden Shackles: The Assumptions of Western Psychology* (カセットテープ。入手先: Psychological Processes, Box 37, El Cerrito)

(2) 夜間の夢見への一定の種類取り組みは、成長過程の一部としてきわめて貴重なものになりうる。たとえば、夢の適切な分析は、偽りの人格のメカニズムとダイナミクスへの洞察を与えることができる。また、含意的トランス中での自己想起と同様の特殊な明晰さを培うことができ、その結果非常に興味深い発達をもたらす可能性がある。本書はこの考えを展開させる場ではないが、しかし拙著「変性意識状態」中にはそれに関するいくつかの章がある。また、*The Open Mind* vol. 1 の第1、2、4号で、それについてかなり詳しく書いた。ステイーン・ラバージは「最近」*Lucid Dreaming: The Power of Being Awake and Aware in Your Dreams* (Los Angeles:

Jeremy Tarcher, 1985) という、明晰夢に関する素晴らしい本を出した。

- (3) 人生には、客観的自己意識のような状態が、それ以前になんの自己想起の努力もしなかったにもかかわらず、急に起こる、そういう稀な瞬間がある。これらの状態は、もし正しく用いられば、ありがたいものである。それらは、あなたが何をするか次第で、非常に活気づけになりうるし、あるいはすぐに忘れ去られる可能性もある。それらが起こる時は、それらを感じて受け入れ、そしてそれらから学ぶようにすればよいが、しかしそれらに依存してはならない。お金が路上に置いてあるのを見つけることは素敵なことだが、しかしそれは非常にあてにならない生計の立て方である。

- (4) Tart, "States of Consciousness and State-Specific Sciences," *Science* 176 (1972): 1203-1210; Tart, *States of Consciousness: Transpersonal Psychologies*.

第二十章 靈的現実、ワーク、祈り

あらゆることがワークにかかっているかのようにワークに打ち込みなさい。
あらゆることが祈りにかかっているかのように祈りなさい。

— G・I・グルジエフ

グルジエフの思想は実に多くの有益な心理的理解と技法を含んでいるので、純粹に心理的なレベルでそれらを研究することが可能である。すなわち、「靈的スピリチュアルな」觀念——われわれは身体以上の存在であるという觀念——へのなんの関心もなしに、あるいはそれらを受け入れることなしに、それらから利益を得ることができるのだ。

いくつかの点で、これはすばらしいことである。「靈的」という名においてあまりにも多くのナンセンスが広められてきたので、それに対してわれわれの文化が抱く反感には多くの健全な側面がある。同時に私は、きわめて重要な靈的現実があるということを確信しており、でもしわれわれが靈的現実を受け入れて靈的に進化しなければ、われわれもわれわれの文化も死に絶えるであろう。何かおよびあらゆるものを、「靈的」というレッテルが貼られているが故に信じることは恐の骨頂である。靈的という觀念に結びついた何かおよびあらゆるものを反射的に信じないこともまた、それと全

く同様に馬鹿げたことである。盲目的な信または不信ではなく、知性、識別力および個人的な体験こそはまさに必要とされていることなのである。

本書で私はグルジェフの教えに心理学として焦点を合わせているが、それは、そうするのが私にとって彼の教えを理解する最善の仕方だからである。けれども私は、それがグルジェフの全てだという印象を与えたくはない。彼の心理的観念は非常に精緻で洗練された靈的体系に組み込まれていた。多くの偉大な靈的体系と同様に、それは全宇宙を、絶対者の、統合した、意味ある、生きた顕現とみなす世界観である。人間は、この生きた、進化しつつある宇宙の中で居場所と役割を持っている。人間の役割は、宇宙の尺度でより高次の諸存在——通常の用語では「非物質的」または靈的とみなされるであろう諸存在——と連動している。人間が合意的トランスの狂気に陥り、みずからの本当の可能性と役割との接触を失ってしまったことは悲劇である。第四の道は、単にあなたの有機的バイオコンピューター内のプログラミングを最適化するやり方ではない。それは、われわれが知っているものとしての有機的、物質的生活を最終的に超越し、それによって人間がみずからの本当の役割と幸福を取り戻させることができるようにする、そういう靈的成長の体系なのである。

ここで私は、グルジェフの宇宙論や靈的観念についてこれ以上説明するつもりはない。それらについては補遺Aに言及された著作の中で多々書かれてきており、それらについての私自身の理解は不十分なものである。それらは、安易に日常的経験の中で試されるべき類のものではないのだ。本章では、私はグルジェフの観念のいくつかを「グルジェフによれば……」ふうの言い方で提示しなければならぬ。それらは私の個人的な体験を超えているからである。そうした説明は本書の本章以外の部分ではおおむね避けたが、ここではもしそういう言い方をしなかつたら、あまりにも不完全な描像を

与えてしまおう。

本章で私がしようとしていることは、われわれの通常の機能よりも真に「高次」である出来事の興味深い例——人間の状況について私が理解していることを幾分なりとも分かち合うという企てと結びついた例——を提示することである。合意的トランスの病理に焦点を合わせることは必要ではあるが、とりあえずそれをひと休みし、次の例を用いて、折りという考えについて何事かを例証することにしよう。

メアリーの夢

一九八一年十一月、私は、グルジェフその他の情報源から覚醒について学んだことのいくつかを応用するための実験プログラムを開始した。それは「気づき増進訓練」と名づけられ、私は二年半それに取り組んだ。それは、自己観察と自己想起のための基本的プロセスを教え、遭遇したさまざまな問題と見出された洞察を分かち合うための夕方のミーティングを催すこと、および集中的なグループワークのための毎月一回の田舎での週末のリトリート（研修）から成っていた。週末のグループワークは、リトリート用施設の建設と維持に結びついたさまざまな肉体的ワーク活動（自己想起に関連した）を伴った。

私がこの気づき増進訓練を始める一年半以上前、参加者の一人で、後に私の教え子になったメアリーという女性がある夢を見た。彼女は、当時、規則的に夢日記をつけていた。次に紹介する夢は、彼女がそれを見た時には彼女にとってなんら特別な意味をなさなかつたが、しかし彼女はそれを記録

し、そしてほぼ三年間それを忘れていた。そのメアリーの夢とは次のようなものである。

夏の暑いある日のこと。私は一群の人々とワゴン車に乗っている。

私たちはある建物に到着して、田舎のある種のテラスのような所に坐っている。それは修復中で、人々がそれに取り組んでいる。一人の男性が、南に面した外壁にたてかけられた長い梯子から降りてくる。彼はペンキが入ったバケツを持っていて、私はペンキのクリ色についてコメントしている。その色が紫がかっているように見えるからである。

私たちは、風変わりな、古い赤さび色のストープがある、ややがらんとした台所に案内される。食べ物は何か料理されていて、そこで私たちに会った屋主が私に、それに指を入れて味見してかまわないと言う——ねばねばした食べ物だ。彼は特徴のない人で、特徴のないグレーの服を着ている。

私たちは台所を見回す。あまり見るべきものがないので、裏口を通って外に出る。私は少々混乱している。私たちは屋内にいたのだが、まだ台所らしきものを見ただけだからである。

外には目のさめるような、丈の高い、しなやかな夏草や、木々や、なだらかに起伏している丘の並びがあり、上には青空と燃えるような太陽がある。とても気分がいい。

私たちは家の裏手に歩いていく。そこは陰になっていて、そこに以前の屋主たちが埋葬されていると教えられる。グループの一人の女性がかなりヒステリックになり、彼らは納棺されておらず、ミイラ化した死体が幾分かマルチ（土壌水分の蒸発防止・霜害防止・雑草の抑制などのために根元の地面に広げられるわら・木の葉・泥などの混合物「腐葉土」——訳注）に覆われている、と語っている。私は、死者を怖れる理由はないと彼女に言って、自分で見に行く。

一人の男性と一人の女性の、二つの「墓穴」がある。私は男性の墓穴の前に立つ。薄い土の層を通して彼の死体の輪郭が見える。私はとても安心した気持ちになる。なんらかの仕方では彼と意思が通じ合っていて、確かに彼が私に話しかけようとしていることがわかる。しばらくすると呼吸運動が始まり、彼の顔の上の土がざわめいており、それから波立つような動きが全身を覆っているマルチ中に及ぶ。彼は跳び起き、土を振り払い、声をたてて笑い、そして自分はこの場所が本物であることを立証するために屋主に雇われたのであり、私たちがここに来たのはそのためだと言う。

メアリーは、一年以上気づき増進訓練に参加した後のある週末のリトリートで、自分がその夢に出てきた場所におり、一年以上もの間「死」から——合意的トランスから——よみがえることに取り組んでいたことに突然気づいたのだ！ 次のような著しい相似に注目していただきたい。

夏の暑いある日のこと。私は一団の人々とワゴン車に乗っている。

・訓練プログラムの最初の週末リトリートは十一月に行われたのだが、暖かな、素晴らしい日より、ほとんどの週末はそんなふうであった。リトリート・センターがあるメンドシノ郡の夏日は通常暑く、メアリーが住んでいたパークレーの典型的な夏日とは対照的である。

・学生たちは、しばしば、学生用のワゴン車の一つに乗って、交替で運転しながらやって来る。

私たちはある建物に到着して、田舎のある種のテラスのような所に坐っている。それは修復中で、人々

がそれに取り組んでいる。一人の男性が、南に面した外壁にたてかけられた長い梯子から降りてくる。彼はペンキが入ったバケツを持っていて、私はペンキのクリ色についてコメントしている。その色が紫がかったように見えるからである。

・リトリート用の建物は大きな長方形の建物で、山腹の突き出した高台の上に建てられている。
 ・グループは絶えずその維持と新築の両方に取り組んでいた。訓練が始まった時、それがまだ充分に機能していなかったからである。

・外壁にたてかけられた梯子に登ってする作業がたくさんあった。数人の学生たちは梯子に登ってする作業を怖がったので、この梯子での作業は感情的に突出し、しばしば話題にされ、冗談の種にされた。

・その建物のもっとも目立つ外観上の特徴は、床から屋根にまで及ぶ半透明の窓がたくさんある、南に面した長い壁である。

・その建物は濃褐色をしており、ペンキ塗りの作業はしばしばグループワークの一部であった。

私たちは、風変わりな、古い赤さび色のストーブがある、ややがらんとした台所に案内される。食べ物がか料理されていて、そこで私たちに会った屋主が私に、それに指を入れて味見してかまわないと言う——ねばねばした食べ物だ。彼は特徴のない人で、特徴のないグレーの服を着ている。

・台所は幅二十フィート、奥行六十フィートの建物の一方の端にあり、台所の反対側の端にある小

さな睡眠用ロフトを除き、内部は広々としている。普通の家庭の台所と比べてがらんとしている。ガス・ストーブは古めかしく、少々腐食し、錆ついている。

・学生たちは交替で料理し、普通、御馳走と呼ばれるのもっともふさわしいものを作った。食べ物の方は一般にとっても興味深く、おいしかったので、グループは気づき増進訓練 (Awareness Enhancement Training: AET) だけでなく、食事増進訓練 (Eating Enhancement Training: EAT) にも熱中していると、しばしば冗談が言われた。

・屋主である私は、田舎にいる時は、グループとワークをする時を含め、ほとんどいつも、古い、特徴のないジーンズと、色あせた灰色がかった青色のシャツを着ている。

私たちは台所を見回す。あまり見るべきものがないので、裏口を通って外に出る。私は少々混乱している。私たちは屋内にいたのだが、まだ台所らしきものを見ただけだからである。

・建物の内部は広々としていて、床から天井までの高さが十四フィートあり、たいてい未完成で、さらに建築中である。通常の基準によれば、はっきりと区切られ、ごくありふれた台所部分を除き、機能の点であいまいである。

外には目のさめるような、丈の高い、しなやかな夏草や、木々や、なだらかに起伏している丘の並びがあり、上には青空と燃えるような太陽がある。とても気分がいい。

・周囲の環境の完璧な記述であり、そこにいると通常感じられることである。

このポイントまで、われわれはリトリート・センターの物理的特徴と周囲の環境についての見事なほど正確で、かなり文字どおりの記述をたどってきた。以前の夢に対する注意を喚起したのは、これらの相点である。過去の心霊的な夢を調査していた時、それらの夢が時としてそれら自体への注意を喚起させるほど明白な、一つの状況との物理的相似と共に始まり、それからより意味深い、感情的なメッセージと共に進行するということに私は気づいた。メアリーに夢を思い出させたものは、覚醒のワークに対する彼女の深い思いと関係があるということが容易にわかる。

私たちは家の裏手に歩いていく。そこは陰になっていて、そこに以前の屋主たちが埋葬されていると教えられる。グループの一人の女性がかかりヒステリックになり、彼らは納棺されておらず、ミイラ化した死体が幾分かマルチ（土壌水分の蒸発防止・霜害防止・雑草の抑制などのために根元の地面に広げられるわら・木の葉・泥などの混合物「腐葉土」——訳注）に覆われている、と言っている。私は、死者を怖れる理由はないと彼女に言っ、自分で見に行く。

・グルジェフは、多くの人は、たとえ歩いたり話したりしていても、彼らの本質が事実上死んでいるが故に、死んだも同然だと述べた。気づき増進訓練の目的は、生徒たちを自覚めさせ、甦よみがえらせ、本質のエネルギーが偽りの人格によつて奪い去られてしまったせいで埋もれていた生命を回復させることであつた。

・学生たちは、しばしば、覚醒し、既知のものに安住することを放棄して、未知のものに心を傾注することについての恐れや相反する感情を吐露した。

一人の男性と一人の女性の、二つの「墓穴」がある。私は男性の墓穴の前に立つ。薄い土の層を通して彼の死体の輪郭が見える。私はとても安心した気持ちになる。なんらかの仕方では彼と意思が通じ合っていて、確かに彼が私に話しかけようとしていることがわかる。しばらくすると呼吸運動が始まり、彼の顔の上の土がざわめいており、それから波立つような動きが全身を覆っているマルチ中に及ぶ。彼は跳び起き、土を振り払い、声をたてて笑い、そして自分はこの場所が本物であることを立証するために屋主に雇われたのであり、私たちがここに来たのはそのためだと言う。

・リトリートの主要な役割は、私と学生たちが合意的トランスからお互いに目覚めさせ合い、より大きな気づきと生きいきした状態を作り出すため、お互いに「目覚まし時計」役を果たすことであつた。この場所が本物である証拠は、事実、合意的トランスの生きながらの死からいかに人が起き上がることができるかを示すことであつた。

メアリーの夢をわれわれはどう理解したらいいのだろうか？ まず、折りについて検討してみること
にしよう。

祈り

祈りは、現代の知的、科学的サークルでは流行の話題ではない。いくつかの知的なサークルでは、瞑想——それも興味深い、エキゾチックで、東洋的なもの——は前衛的なものとして受け入れられるかもしれないが、しかし祈りはどうであろう？ それは、自分を慰めるために迷信的な実践を必要としている無学な人々のために取って置かれている。

人々は、しばしば、祈り、*prayer*と瞑想、*meditation*という言葉を互換的に使うが、これが混乱の元になるのだ。無神論者は、たとえ必然的に実在しない神に向かつて祈ることはできなくても、瞑想することはできる。瞑想とは、適切にも、自分の心の意識の特質あるいは状態を変換することを意図した、内的な心理的実践のことをさす。その効能は、もつぱら、瞑想する人の技量から生じる。これに反して、祈りの効果は、それに応えるかもしれない（存在）あるいは諸存在の「超自然的」または非日常的な秩序がある限りにおいて生ずる。日常的会話で瞑想あるいは祈りと呼ばれるかもしれないいくつかの実践は、われわれが使っている用語としての瞑想と祈りの両者の特質を持っている。

請願の祈り

祈りのうちもっとも典型的なものは、より厳密には、請願の祈りと名づけることができる。祈っている本人よりも力のある誰か——もしその気になれば、非通常のな手段によって願いをかなえる力を持った存在——への請願である。われわれの文化では、その「誰か」は、普通、神、イエス、聖人、

あるいは天使を意味する。カトリック教では、聖人たちは、死んだ後長く経ってからでなければその称号を与えられず、したがって請願の祈りはほとんど常に非物質的な存在に向けられる。科学主義サイエンティズム（独断的な宗教としての科学の機能）は、ずっと以前、非物質的な存在の存在を拒絶したので、当然ながら祈りが聞き届けられる可能性はない。たとえ宇宙のどこかになんらかの物質的な形で存在している別の知性があるとしても、心の中にしか存在していない思いをどうやって彼らは聞くことができるのだろうか？

科学主義は、そのもつとも寛容な気分では、祈りは心理学的または精神医学的関心から起こりうる主観的な努力で、祈る人に多分何か役に立つことをするだけのものとみなす。そのより一般的な気分では、科学主義は祈りのことを、なして済ますほうがはるかにましであろう、迷信やナンセンスの卑俗化した例とみなす。

祈りに対する科学主義的態度は、その効果についての詳細にわたる上質な科学的研究と私なら呼ぶであろうものに基ついていない。事実、（もしわれわれが超感覚的知覚またはサイコキネシスに関する研究を加えなければ）祈りに関する研究はほとんどないに等しかった。祈りに対する真の科学的態度は、事実上われわれはそれについてほとんど何も知らないこと、また、祈りが心理的なものを超えた効果を及ぼす可能性を独断的、先験的に拒絶することは良質の科学とは言えない、ということを認めることであろう。

祈りのメカニズム

祈りそのものについての科学的研究はほとんどないが、その一方で、超感覚的知覚 (extrasensory perception: ESP) とサイコキネシス (psychokinesis: PK) の両方の現象をカバーするために現在用いられる一般的な名称となつている「サイ (psi)」（ギリシャ文字と同様に発音される）に関する一群の詳細な研究データがある。それは、ここでのわれわれの議論の範囲を超えた、主として不合理な理由のために無視され、拒絶されているが、七百件を上回る一群の周到な超心理学的実験は、人間が時折PKだけでなく三種類のESPを見ることがあることを示してきた。簡単に言えば、テレパシー——精神感應——はESPの一種である。透視——身体感覚を使わずに事物の状態、その当座は誰にも知られていない情報、を直接知覚すること——は二つ目の種類である。予知——まだ確定していない未来の出来事を予言すること——は三つ目の種類である。サイコキネシスは、既知の物質的な媒体の介入なしに心が事物に直接影響を及ぼすことである（精神力によって物体を動かしたり、操作したりする超能力——念力、念動、観念動力——訳注）。たとえば、念じるだけでサイコロの落下に影響を及ぼすとか、最近の実験的な研究でよくあるように、念力だけで電子式ランダムイベント生成プログラムの操作にバイアスをかけるなどがその例である。

祈りについてのわれわれの議論にとつて極めて興味深く、またそれに関連しているのは、人々が、自分がそうしているとは知らずにサイを使うことができることを示す証拠があることである。実証的実験の結果、人は知らないうちにESPによつて状況を走査し、多くのありうる行動のうちのある一定のことをもし彼が「ただたまたま」すれば、そうしない場合よりも結局はより有利な状況にいるこ

とを発見するかもしれないということがわかった。ある種の無意識的なESPが使われていることがわれわれにわかるほど充分に多くの人々が、結局は適切なことを行っているのである。

もしわれわれが折りのことを（物質の本質についてのわれわれの現在の概念に照らして「非物質的」なレベルの現実または諸存在と接触する一つの仕方とみなすなら、ESPはそのための意思疎通の明白なメカニズムであり、ある種のPKは人が「幸運」になるように現実を変えるための手段である。これらのサイ能力をわれわれが無意識的に用いることができる程度まで、われわれは知らず知らずの折りのためのメカニズムを持つ。なぜならその時には、われわれの希望や怖れが、通常の仕方だけでなく、さらに超常的および心霊的な仕方であられる現実に影響を与えることができるからである。

実験室で起こるサイ現象は、普通、非常に小規模で、偶然の結末から少しずれている程度であつて、きわめて信頼性が低いのが普通である。これは、部分的にはサイを扱う技量の欠如に帰すことができるが、しかし部分的にはわれわれの願望の変わりやすさと一貫性のなさによるものかもしれない。グルジェフは、自分の存在を統合し、統一することを覚えた結果として、いくつかの非常に印象的な心霊的離れわざを演じたことがあると主張したが、しかし彼は心霊的能力をあまり強調しなかつた。覚醒という目標と比べれば、心霊的離れわざの意識的な制御などさして重要ではないし、われわれの文化においてそれらと結びつけられる多くの気狂いじみた考えは、覚醒に対するさらなる障害として働くかもしれないのである。ここでサイ現象を簡単に紹介したのは、実験室での研究で、折りおよび知らず知らずの折りの使用のためのなんらかの基盤があることを示したからである。

折りに対する態度は、多分、科学者の場合も普通の人の場合も、主として個人的な体験から出てくる。われわれは自分が非常に望んでいることがかなえられるように祈るのかもしれない。それがかな

えられることもあれば、かなえられないこともある。もしわれわれが祈りは必ず聞き届けられるべきだと考えるなら、とりわけそれが強い願望から起こる熱烈な祈りの場合は、求めたものが手に入らない時にひどく落胆し、祈りを拒絶するかもしれない。聞き届けられなかった祈りは深い感情的な傷となり、その後の人生でのわれわれの態度に影響を与える可能性がある。同様に、聞き届けられた祈りはわれわれに肯定的な仕方では影響を及ぼす可能性がある。感情の起伏が激しい幼少期には、祈りに対する明らかな答えがあったかかなかったかの体験はとりわけ大きな発達形成因となるので、一つの体験が一生続く態度や、自動化したものの見方を固定してしまうこともありうる。

請願の祈りの効能

グルジェフは、請願の祈りの効能を、人が意図的に祈っているようがいまいが、本人の願望の強さと首尾一貫性の関数であるとみなした。彼は、より高次のレベルの現実または高次の存在との心靈的な結びつきのメカニズムについて詳しく説明しなかったが、われわれの思考と感情はそのようなより高次のレベルに影響を及ぼすことができると信じた。したがって、何かに対して一貫して抱き続けられる願望は、その願望が儀礼的な請願の祈りとして表現されようがされまいが、知らず知らずの「祈り」——より高次のレベルの現実への請願または意思の振り向け——の役を果たすと信じたのである。

四六時中お金を手に入れることを考えている人は、その人が自分のことを宗教的人間だと思っ
ていようがいまいが、ひざまずいて儀礼的に神にお金を乞おうが乞おうまいが、事実上、知らず知らずの祈りでお金を乞うているのである。自分に悲劇が降りかかることを想像している人は、實際上、それ

を乞うているのである。もちろん、われわれの習慣的な態度は、多くの通常の、心理的に理解しうる仕方では人生に影響を及ぼすが、しかし知らず知らずの祈りは、時として（たとえ無意識的に望まれたのだとしても）悲劇的な結末を伴う、われわれが自分の人生を削り上げるもう一つの仕方なのである。グルジェフがしばしば表明したように、あなたの存在があなたの人生を引き寄せるのである。もちろん、他の多くのことがあなたの人生に影響を与えるが、しかしあなたの態度およびアイデンティティが、それら自身を反映したものを生み出す傾向がある。さまざまな仕方でああなたの世界に影響するのである。

そこで、グルジェフにとって、効果的な請願の祈りとは強烈で首尾一貫した願望と思考のことである。しかしながら、ほとんどの請願の祈りは、儀礼的なものであれ知らず知らずのものであれ、ほとんどなんの効果もないと言ってよい。

まず第一に、普通の人は、本質的に異なる、しばしば相反する願望を持った変わりやすいアイデンティティに悩まされているので、さまざまなアイデンティティの知らず知らずの祈りが互いに矛盾し合い、たいていは互いに打ち消し合う傾向がある。「私はXを望む」と「私はXには興味がなく、Yがほしい」と「私はXが嫌いだ」が行き当たりばったりに入れ替わったら、宇宙のより高いレベルに一貫したメッセージが届かないとしても致し方ないであろう。

第二に、効果的な祈りへの障害となるのは、われわれが意識的に強烈に、なることができないということである。外界の出来事に誘発され、偽りの人格の自動化したパターンで機械的に予測しようように反応する通常の感情は、一時的に強い願望や、強い儀礼的または知らず知らずの祈りを生み出すかもしれないが、しかし外界の出来事は変化し、焚き付けられた願望は消え失せる。

生命を脅かすような状況にいる人は心から強く祈るかもしれない。「神よ、私の愛する者の命を救いたまえ。そうしてくだされば、私はもう二度と再び罪を犯したりいたしません！」「愛する人が元氣を取り戻し（この祈りになんらかの関係があるかもしれないし、ないかもしれない出来事）、ストレスが消えると、二度と再び罪を犯さないという約束もいつの間にか萎み去る。われわれは自分の複数の自己（の全て）を覚えていないのである。感情に対するこうした支配力の欠如は、もちろん、ほとんどの特定の人格が特定の感情の中核を持っているために、複数の偽りの人格が入れ代ることに関わっている。

効果的な請願の祈りは、真正正銘意識的な人——意のままに、長期間、気を散らすことなく、意識的に祈るための知的・感情的強さを意図的に奮い起こす人——には、ずっと大きく可能になるであろう。もし彼が自分のより統合された建設的な副人格から、あるいは自分の本質エッセンスから祈るなら、なおのこと効果的であろう。第三の意識レベルから祈ること——自己を想起しつつ祈ること——は、全てのうちでもっとも効果的である。

誰または何が祈りに答えるのか？

グルジェフのいささか逆説的な発言のことを考えてみよう。

あらゆることがワークにかかっているかのようにワークに打ち込みなさい。

あらゆることが祈りにかかっているかのように祈りなさい。

グルジェフは、われわれは、自然的あるいは超自然的な助けも期待することなく、自分自身を理解し、変容させるという仕事に取り組まなければならない、と強く感じている。私だけが私自身を変容させることができ、で、私の努力のみが重要なのである。私がつけている力は努力することから来る力である。私は、ただ祈願するだけで筋肉をより強靱にすることはできないし、他の誰かが魔法の力で私の筋肉をより強靱にすることもできない。私は押し引いたり曲げたりして、何度も何度も自分の限界まで、あるいは限界を少し超えたところまで、自分自身を駆り立てなければならぬ。そうしてこそ私はより強靱な筋肉を得られるのだ。心理的な成長についてもそれと違いがあるだろうか？

厳密に心理学的な観点からは、願いごとをすることも祈ることも、われわれが実際にする必要があらることからわれわれを逸らす空想であることは明白であるように思われる。ただワークをやりこなしていくほうがましなのである。

けれどもグルジェフはまた、あらゆることが祈りにかかっているかのように祈りなさいとも言った。われわれは、ワークの努力は上からの助けがなければ無駄に終わるということを認識して、より高いレベルからの助けを求めなければならないというのである。

彼の実際の教えでは、彼は祈りではなく、ワークの努力を強調した。彼の弟子たちは、一般に、祈りのような「高次の」観念についてのあまりにも多くの歪んだ、不正確な考えを抱いていたので、彼らが自分自身に対する充分な心理的ワークを行い、さもなければ真の祈りの努力をほとんど故意に妨害してしまうであろう偽りの人格のいくつかの側面を一掃するまで、それについて多くを教えるのは適切ではなかったのである。

祈りについての状態特定的見方

あらゆることが努力にかかっているかのようにワークしなさいという訓戒と、あらゆることが祈りにかかっているかのように祈りなさいという訓戒との間のパラドックスは、われわれの通常の意識状態では部分的にしか解決できない。より満足のいく解決には変性意識状態から引き出される考慮が必要である、ということを私は見出した。

数年前、状態特定の科学についての考えを提唱した際、われわれの通常の意識状態は多くの点で限られており、恣意的であると私は述べた。通常の状態では、われわれは人間の知覚、論理、感情、行動の可能性の全範囲ではなく、それらのうちの選ばれた特殊な範囲のものだけに接近できる。この選択は、一般に、われわれの特定の文化内での生存と達成の日常的問題には役立つが、しかし日常性を超えたその他の人間の問題にはきわめて不適切である。こうした限界については以前のいくつかの章で詳しく論じた。

私の通常の合意的意識の観点から見れば、あらゆることが私自身に力がかかっているというものは全く明白である。現実的には、私はまた、自分の努力の効果は、他の人々の願望によって、自然法則によって課される制限によって、および偶然によって修正されるということを実感している。私は、次の研究プロジェクトの資金手当てをできるように、百万ドルのお札がフロアーの真ん中に急に現われますようにと祈ることができる。それはやりがいのあるプロジェクトなんです、間違いなく！だが、何も起こらない。通常のルートでの資金調達の仕事についての本を読んだほうがましであろう。奇妙なことが時々起こることがあるが、しかし私はそれらを幸運（それが何を意味しよう）ま